

Title	「歴史主義」の意味の混亂
Sub Title	A semantic confusion of "Historicism"
Author	神山, 四郎(Koyama, Shiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.3/4 (1961. 4) ,p.107(365)- 117(375)
JaLC DOI	
Abstract	<p>Prof. K. R. Popper coined a new word "historicism" quite independently of the German "Historismus" under which he meant a method of social science which makes historical prediction possible on the basis of a certain law. But the German counterpart "Historismus" already had a particular meaning of itself in the history of modern European thought, that is, a special kind of historical knowledge which is both intuitional and unscientific rather than conceptual and scientific. Evidently "historicism", in Popper's use, has a meaning contrary to that of Meinecke and Dilthey. It is a matter of more than a mere exercise in semantics to make a word with a traditional meaning carry forcibly another which is diametrically opposed to the former. After creating the new meaning of historicism in this way, Prof. Popper discarded it maintaining that there could be found no scientific reliability and he went so far as to deny the possibility of such a science. He says, "we must reject the possibility of a theoretical history, .....historicism collapses" (The Poverty of Historicism). In denying the new concept of "historicism", Prof. Popper inadvertently came to the same conclusion as German historicists did. However the grounds for which he abandoned the scientific concept of historicism entirely differ from those of the German scholars. To Popper the Marxism, for instance, is not scientific at all, while to Meinecke among others it is scientific. What, then, is "historicism" which is not science to one but is science to another? We shall be saved from this terminological confusion, if we apply the traditional name "philosophy of history" or "metaphysics of history" to "historicism". As regards "historicism" first christened by Prof. Popper, I am of another opinion. In the field of social science, we are now in a position to find out a law which is analogous, though in approximation, in structure to the laws of natural science, physical or biological. I approve, therefore, the scientific historicism to a certain degree, though I do not intend to have recourse to such an ambiguous concept as "historicism".</p>
Notes	史学科開設五十周年記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610400-0107">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610400-0107</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 「歴史主義」の意味の混亂

神山四郎

このころでは歴史の分析哲學的研究において、またそれに關係する社會科學の理論的・方法論的な諸論述において、「歴史主義」「Historicism」という言葉がしばしばつかわれるようになった。しかしその意味がつかう人によつて必ずしも一定していないために、議論にいろいろな食いちがいがおこつてゐることも事實である。それはたんにひとびとの不便という以上の混亂さえひきおこしているのです、このさいそれを少しでも明らかにしておきたいと思う。

現在、歴史學を新しい科學原理の上になつて一個の科學として確立するためにその基礎理論的な研究が求められている折から、科學者と史學者の協力ということが當然必要になつてくる。それはとりわけ、いろいろな部門の社會科學者との間に緊密な連絡が求められる。そうやつて協力しながら社會諸科學間の境界線を新しい科學原理にもとづいて劃定しなおしてゆくことが一つの工程であるとすれば、そのばあいまづつかわれる術語をできるだけ共通のものにしておくことが望ましいわけである。その調整の仕事はさしあたり分析哲學者の仕事になるだろう。またそれは史學者にとつてもありがたいことにちがいない。歴史のあつかう全領域の言葉が記號化できるとは思わないが、術語の統一は一般化できる部分からどんどん共通の方向に向つて整理してゆくべきだと思ふ。

ところでいま、「歴史主義」という概念が社會科學上の一概念としてかなり廣くつかわれているといつたが、ひとはも

う哲學主義とか科學主義というようなことはいわないのに、ひとり歴史の領域だけに歴史主義というようなあいまいな言葉が通用しているのは、實はこの領域の分析がまだそれほど進んでいないという證據である。しかしこの言葉を最初に社會科學的につかつたのは他ならぬ分析哲學者として盛名を馳せている K. R. Popper なのである。おそらく彼が予想しなかつたのだらうとは思うが、それは一つの混亂をひきおこしている。すくなくともこれは諸學者にとつて迷惑なつまずきの石になるので、早くとりのけた方がよい。

まずポPPER自身がこの語をどうつかつていのかを見てみよう。彼が「歴史主義」“Historicism”というとき、それは彼にとつて科學的内容のきわめて「貧困」であると見られる一つの社會哲學を指している（彼の最も理論的な分析的な著述「歴史主義の貧困」“The Poverty of Historicism, 1957”はマルクスの「哲學の貧困」をもじつたものである）。また、その理論が科學的・理論的には「論駁」される對象としていわれている（結局この本の主題は終始「歴史主義の論駁」refutation of historicism である）。また、形而上學的な歴史の予言説として彼の合理的な社會理論の「敵」と見られるものである（“The Open Society and its Enemies, 1952”は結局プラトン、ヘーゲル、マルクスの形而上學的な歴史主義を民主主義的社會理論の「敵」と見て、それを分析的に批判している本である）。

このようにポPPERにとつては科學的批判の對象、論駁すべき敵と見られるものが「歴史主義」なのである。（1）しかもそれが彼にとつては結局“Historicism collapses”<sup>註(1)</sup>といつて、否定されたものなのであるから、多分に假設的な概念でしかない。それなのに一般には反つて實在のものとして通用しているところに問題がある。（2）その上、それはポPPERとしては新造語のつもりかもしれないが、ヨーロッパの思想史においてすでに一定の役割を果している既

成概念である。それとの關係を考えないで新語をつくつたとも思われないが、しかしそれとの關係を考えてみれば問題は一層複雑になる。

まずポッパーが指し示す歴史主義の主要な特長は何であるか。彼のいつているままをかいつまんでみれば、

(1) 一定の社會法則から歴史の必然的方向を予見することを主要な目標とする社會科學の一方、歴史の「リズム」「パターン」「法則」「傾向」を發見しようとする、また發見したと思つてゐる一つの科學的決定論のことである。<sup>(2)</sup> 彼はいう、「一定の社會法則から予見を主張する……この種の要求を主張するいろいろな社會哲學を私は *Historicism* という名の下に一つにまとめた」。<sup>(3)</sup> 例えばマルクスの體制必然論。

(2) 彼のいう「開かれた社會」即ち「民主主義的な改革の可能性」に對する偏見の原因となるような社會哲學、即ち合理的な漸進的な進歩を否定して一種の賭的な非合理的進化を主張する社會理論をいう。<sup>(4)</sup> 例えばヘーゲルの歴史哲學。

(3) いわゆる「選民の思想」としての有神論的な歴史の予定説、即ち人類の歩む運命的なみちを神の救濟計畫として予言しようとする歴史理論。<sup>(5)</sup> 例えばキリスト教の歴史神學。

これは十八世紀以來ヨーロッパの思想上、とりわけドイツの思想界に形成されてきた既成概念の「歴史主義」「*Historismus*」の意味と比べてみると大きなちがいがあるのに驚く。勿論、歴史主義という言葉は、K. Heussi がいうように、きわめて「多義的なさまざまに變容する標語」<sup>(6)</sup> であつて、けつして一義的に定義できるものではないが、そのごく基本的な考え方を見てみるだけですでにそれと根本的にちがつてゐることはすぐ分る。

このちがひ、この問題についてのいちばん新しいそして歴史主義について廣く深い理解を示している H. Meyerhoff

の編著 “The Philosophy of History in Our Time, 1959” と、簡明で要を得た Lee and Beck の好論文 “The Meaning of Historicism, 1954” と、すこしさかのぼつて一般に最も高い評價をうけている K. Heussi の好著 “Die Krisis des Historismus, 1932” から、それぞれその要點を引き出してみよう。

マイヤーホフがとらえた歴史主義の一般的特長は、(1)歴史に對するあらゆる「體系的」アプローチを否定する。(2)歴史のいかなる單一的または統一的解釋も否認する。(3)歴史の基礎的な概念は變るものであり特殊なものであるという積極的な主張<sup>(8)</sup>。

リーとベックが定義した歴史主義の意味は、(1)何らかのもの眞、意味、價值の基礎はその歴史の中に見出される。(2)人間の現在の政治的・社會的・知的立場または問題を理解したり評價したりすることに對する一つの基礎的な或いはただ一つの要求は歴史的な知識である。このような反實證主義的・反自然主義的な見方を指している<sup>(9)</sup>。

ホイシにとつては、ごく要約してしまえば、結局(1)事實のための事實鑑賞としての審美主義と(2)あらゆる眞理の不變性を否認する懷疑主義(3)相對主義の三點に歸する。歴史主義を一言でいえば「あらゆる價值の相對化」ということである<sup>(10)</sup>。

この歴史主義の非體系的アプローチ、反理論性、懷疑と相對化ということは、ポッパーのあげた歴史主義の内容およびその反對のものを示してはいないか。その機能としても、ホイシのいう歴史の審美主義(例えばブルクハルトのよな)は「うしろ向き」の思想であるのに、ポッパーのいう歴史主義(例えばマルクスのような)は「前向き」の最もラディカルな社會革命理論である。

なおこの歴史主義という思想が形成されてきた契機をヨーロッパ思想史の上にさぐつてみれば、それはもともと、ヴィコやヘルダーのように、十八世紀啓蒙思想の合理主義に對する非合理主義の、そのコスモポリタニズムに對する民族主義の主張において、十九世紀のヘーゲルの觀念論の普遍主義に對してランケの個別主義において、また法學界では自然法・萬民法の理論に對してサヴィニー等のいわゆる歴史法學派の立場として、またスミスの古典派經濟學に對するメングー、シュモラーなどの國民經濟學派の立場において、十九世紀末から二十世紀にかけては、ディルタイやマイネッケのように、歴史學に自然科學的方法を導入することを一切拒否する生哲學的または個體神秘主義において、主張されているものである。

それは一見して明らかのように、近代化推進の諸思想に對する保守的または反動的な契機において一貫して主張されてきている。それ自體いつも受け身できわめて消極的な思想である。リーとベックが「Kampfbegriff」だというのはそういう相手あつての概念という意味である。とにかく歴史主義が一度として積極的に一つの推進的な社會理論としてうつて出たためしはない。近代思想史上におけるその役割は、普遍的理念からの演繹または素朴な科學主義の獨斷的な一般化的方法によつて見失われがちな個別的なものの自己主張であり、その擁護である。そしてそれが後進國ドイツの民族主義を支えていた。それはちようど「ヒューマニズム」という概念が非人間化的契機をもつ狀況下においてのみ一つの「思想」として意識されるのと同じようなものだろう。そういう消極的な多分にエトスの要素以上のものでない歴史主義と最も積極的な社會理論としての歴史主義を同一の概念で呼ぶことは、どうしても誤解を生じるおそれがある。

このようにポッパーがつかつている「歴史主義」の意味は從來の思想史的につかわれてきている「歴史主義」の意味

とは大きなちがいをもっている。いくら新語をつくつても、それが既成の概念とまつたく無關係につくられてよいものではない。同一の概念が全然一致しない、一致しないどころか反つて相反しあう内容を含むとすれば、それをつかうばあいの混乱は避けられない。ポッパーが試みた「歴史主義」の概念が既成概念との間に混乱をひきおこすとすれば、それを現在社會諸科學の間に共通の術語としてつかうことは避けなければならない。

ポッパー自身は、自分のつかう *Historicism* をドイツ語の *Historismus* の直譯とみられる *Historism* と比べて内容がちがうのだと語義的な説明を多少はしている。<sup>(ii)</sup> 即ち、ポッパーはいろいろな社會學説または學派間のちがいをそれぞれちがった歴史時期における優勢な關心や好みの點から引き出してくるのをヒストリズムだといっている。そしてそれは政治的・經濟的・階級的利害との關係を引きあいに出す「知識社會學」に近い考え方ではあるが、彼のいうヒストリズムには遠いものだといっている。彼の書いたものにはわずかこれしか説明がないが、しかしこれで見ると、前者の意味がディルタイヤトレルチなどの歴史主義を指している點ではそれを直譯的にヒストリズムといふことは當つていゝるが、それが知識社會學には近くてもヒストリズムには遠いといふばあい、このヒストリズムといふ云葉がはたしてそれだけの論據のちがいを表現しうるかどうかは疑問である。兩者のそれほどのちがいをこの英語のわずかなニュアンスのうちに含ませられるかどうか。英語學者自身がその後この云葉のつかい方を誤つてゐるのを見ても疑問が湧く。まして、それを日本語に譯すばあいヒストリズムとヒストリズムのニュアンスを譯し分けることはできそうもない。それほど内容がちがうならなぜはじめからもう少し的確な云葉に使い分けなかつたのか。

ポッパーが獨特の意味を含ませることによつて合致しない二つの内容が一つの概念に含まれることになつたが、それ

がさらに相反しているものであるとすれば、それは混乱というよりはむしろ矛盾といふべきだろう。とりたててドイツ的な歴史主義の立場に立たない人にとつても、そのさいの矛盾は明らかである。即ち、ポッパーが歴史主義と呼ぶ同一の對象に對して、それを否定する者が自らを歴史主義と呼んでいるのであるから、かれらから見ればそれは非歴史主義である。そうするとまさに一つの概念の内容が歴史主義と非歴史主義を同時に含んでいることになる。これは矛盾である。ましてや、マイヤーホフのように傳統的なドイツの歴史主義を擁護する立場に立つている人の目には、それは「セマンティックな練習以上のもの」と映るのもむりはなからう。その點に「ポッパーは射るために的をつくらうとして歴史主義のまちがったイメージを勝手に作りあげた」のだという非難もおこりうるわけである。こういう無用な言葉の「もじり」をマイヤーホフが卒直に「アカデミックな茶番劇」だと評したことは一概に彼の銜いだとばかりいうわけにはいかない。

しかもこの混乱はさらにポッパー自身の上にも及ぶことが避けられない。ポッパーが假定した歴史主義は、一定の歴史法則を前提とした最も科學的な社會理論であるとすれば、それは實はすでにドイツの思想家が否定したものである。しかも例えばディルタイやマイネッケ等はそのような科學的理論的アプローチをいつさい拒否することによつて自らの立場を「歴史主義」と呼んだのであるから、かれらから見れば、それは非歴史主義に他ならない。そうすると一つの歴史主義という概念が二重につかわれることになる。しかもその二重性は一つの科學的アプローチについて肯定と否定が重ねられるというわけである。これは學術的な用語としてけつして適當なものではない。そういう矛盾や混乱はむしろ整理するのが分析哲學者の役目だつたはずである。これは確かにマイヤーホフがいうまでもなくセマンティックな練習以上の問題である。傳統的な歴史主義者に見れば、このようにポッパーが假定した歴史主義はすでに本來の歴史主



義者が否定していたものなのであるから、今さらそれをまた否定するといつてみたところです。すんだ議論をむしかえしているようなもの、要するに「死んだ馬に鞭うつている」としか見えないわけである。マイヤー・ホフが「ヘーゲルやマルクスやコントの風車にまだ突進するということによつてこの種の哲學的分析は自分自身の貧困さを示す」<sup>(13)</sup>以外の何ものでもないと嘲笑しているわけはそこにあるのである。最近イギリスの或る分析哲學者がポッパの議論を批評して“Poverty of poverty of historicism”<sup>(14)</sup>とつたところを聞いたが、それは同じ理窟から出ているのだろう。

しかもそれだけではない。ポッパはその歴史主義をただ假定しただけで、その理論的内容を分析したあげくには結局全部否定してしまつた。理論物理学に對應できるだけの理論歴史學（即ち彼のいう歴史主義）はないといきつた。<sup>(15)</sup>

そのばあい、彼のその歴史主義否定の論據は要するに嚴密な證明に堪える實證科學である。これを今假りに科學主義といつておこう。そしてそれに對してマイネッケらの歴史主義者はポッパが假定したような科學的な歴史主義（勿論かれらはそれを歴史主義と呼びはしないが）をすでに否定していた。その否定の論據は個體の神秘的な表象を直觀的・體驗的にとらえるという、コリングウッドがはつきり言明しているような、いつさいの科學的方法拒否の立場である。いつてみれば非科學主義である。そうすると、ポッパが假定するような歴史主義を否定することにおいて、科學主義と非科學主義が一致することになる。これもおかしいではないか。そういう歴史主義は——たとえ假定にせよ——科學でもなく非科學でもないとするれば、それはいつたい何であるか。

またポッパは歴史主義に反對することによつて、歴史にいかなる單一の客觀的な意味もみとめないことを公言する。歴史に意味があるかという問いに對して彼の答えは“History has no meaning”<sup>(16)</sup>である。したがつて歴史のいかなる統一的・宗教的・合理的・目的論的構想もみとめない。歴史はただあるものとしては不定數の人々の堆積が互

によつかりあい殺しあう以外の何ものでもない、それに何らかの意味があるとすればそれは各人が自分の歴史のメイカーとなつて自分の行動を自分なりに意味づけてゆくだけのことである、<sup>(17)</sup> という。そうすればそういう思想は、社會思想的なカテゴリーにおいては、行動主義または實存主義の立場と軌を一にすると見ることが出来る。ポッパーは自分の立場をプラグマティック・ラショナルイズム<sup>(18)</sup>、即ち“Piece-meal Method”による合理的な改良主義といつてゐるのであるが、それが歴史的社會的状況においては、機會主義や行動主義や實存主義と同一の線上に立つ、もしくはそれへ横すべりするということは充分ありうる。はたしてそれが食いとめられるだろうか。そうなれば彼のもともとの嚴密な科學的客觀主義の立場がおよそ容認しにくい方向に外れることになる。それはまさか彼の本意ではあるまい。

このロンドン大學の哲學・論理學教授の本來の意圖は、おそらく彼の徹底した科學的論理主義の立場から歴史の科學的原理を探求しようというところにあるのであろう。たしかに從來の歴史主義には理論的・方法的に一定の體系がなかつた。それはただ形而上學的な人間觀であり世界觀であり時には一つの倫理であり宗教ですらあつた。強いていえば、科學的方法に對して全面的に反對する人間學的・形而上學的・生哲學的な主張だつた。その反動的な消極的な性格は歴史の理論體系化をけつして受け入れるものではなかつた。それに對してはじめから科學的原理の探求者として形而上學の科學への侵入を拒んで科學的方法の確立をめざすポッパーにとつては、歴史主義はやはりその一つの方法以外のものとしては考えられなかつた。しかし彼が假定して分析した結果は、歴史主義がそれに應えるものでないことを知るだけだつた。「理論物理學に對應する歴史の社會科學の可能性を拒否する<sup>(19)</sup>」。故に“Historicism collapses”。これがポッパーの結論である。しかしそれならこの探求は無意味だつたわけである。即ち社會科學の一方法としての歴史主義を

假定しただけで、それはいつさい可能性までも否定された。そうするとこれは結局従来の歴史主義の主張と同じではないか。科學的な歴史主義に關しては彼は結局何もしなかつたことになる。I. Berlin が、「形而上學的歴史主義の誤りを強く正確に示し、歴史主義がいかなる科學的經驗主義とも兩立しえないことを明確にした」點でポPPER教授以上に明快な證明を與えた人はないといつて激賞しているが、それによつてもう歴史主義と科學的經驗主義を混同する口實はなくなつたにしても、「この扱ひ方がどれほど効果的にその混同を起させないようにするかは別問題である」といつているところを見ると、バーリンはすでにこの混亂の起るのをあるていど讀んでいたかもしれない。

ポPPERが科學の中に形而上學の侵入を拒否するという本來の立場を鮮明にあらわすためには、形而上學的な歴史理論をあえて「歴史主義」などと命名せず、傳統的な呼び名にしたがつて「歴史哲學」または「歴史形而上學」といつておけば、そのまま彼の論旨は一貫して無用な混亂をおこさずにすんだはずである。前述のバーリンの言葉にしても、われわれが「歴史主義」という言葉を「歴史哲學」といいかえてみれば何の問題もおこらない。

筆者はポPPERが假定したような歴史主義の全部が「崩壊」するとは思わない。現在の社會科學の成果においては、物理的法则・生物的法则に嚴密に匹敵できないまでも、それとの類比をたどりながらそれに近似的な社會法則は見出されつつあると思う。だからポPPERのようにその可能性をすら拒否するという形而上學者のような判決は下さずに、多少なりともそこにそれだけの余地がある限り、歴史の社會科學的方法の一つとしてのヒストリシズムを肯定してよいと思う。ただしそのばあい、この「歴史主義」という言葉をつかえというのではない。もうこのばあいの術語に「歴史主義」というような漠然とした概念を使うことはやめた方がよい。もつと分析的に個々の對象に應じて妥當する言葉、例えば生産關係の發展段階とか階層の分解過程の類型とか、そういう個々に檢證されうる名辭をもつて表わすことによつ

て、歴史社會の或る面に關して或る種の法則性を含めて科學的解明を得ることができると思う。これについては稿を改める。

(一九六一・一・二二)

註

- (1) K. R. Popper, *The Poverty of Historicism*, London, 1957, p. X.
- (2) *Ibid.*, p. 3.
- (3) Popper, *The Open Society and Its Enemies*, London, 1952, Vol. I, p. 3.
- (4) Popper, *Open Society*, Vol. II, p. 279.
- (5) *Ibid.*, p. 269.
- (6) K. Heussi, *Die Krisis des Historismus*, Tübingen, 1932, S. 1.
- (7) D. E. Lee, and R. N. Beck, *The Meaning of "Historicism"*, in "The American Historical Review", Vol. LIX, No. 3, 1954.
- (8) H. Meyerhoff (ed.), *The Philosophy of History in Our Time*, New York, 1959, p. 27.
- (9) Lee and Beck, *Ibid.*, p. 577.
- (10) Heussi, *Ibid.*, S. 7.
- (11) Popper, *Poverty*, p. 17.
- (12) Meyerhoff, *Ibid.*, p. 299—301.
- (13) *Ibid.*, p. 299.
- (14) 著者のこの論文をまた見る機会を得た。この論文をまた見る機会を得た。
- (15) Popper, *Poverty*, p. X.
- (16) Popper, *Open Society*, Vol. II, p. 269.
- (17) *Ibid.*, 269—280.
- (18) *Ibid.*, p. 357.
- (19) 註(15)参照。
- (20) I. Berlin, *Historical Inevitability*, Oxford U. P., 1954, p. 10—11.